
デザートバイキング 『チーズケーキ』

桜沢 純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デザートバイキング 『チーズケーキ』

【Nコード】

N1589G

【作者名】

桜沢 純

【あらすじ】

ミチコの大好きな友達のサキちゃん、お菓子作りの上手な、大人びた感じの素敵な女の子。一緒にいるだけでドキドキがとまらない。ほんのりGL短編集『デザートバイキング』。

やばい。やばいやばい。やばいやばいやばい。絶対やばい!!

「みっちゃん。お待たせ！ 帰ろう？」

「う、うん」

「ん。ミチコ、顔赤いけど大丈夫？ 風邪？」

「ううん。火照ってるだけ。帰ろう、サキちゃん」

サキちゃんは、あたしのことを『みっちゃん』とか『ミチ』とか『ミチコ』とか『みーちゃん』とか、ふざけて色んな呼び方をする。あたしは一人なのに、たくさんの呼ばれ方があって、でも、何て呼ばれても、サキちゃんが呼ぶと、あたしの胸は高鳴る。

だから、こうやって一緒に歩いて帰ってるだけで、ドキドキする。

「あ、そーだ。昨日作ったケーキあるからウチおいでよ」

「うん！」

やった！ あたしは心の中でガッツポーズする。サキちゃんが作るお菓子は、その辺のデパートの地下で売ってるようなやつよりずっと美味しい。

「ケーキって、ショートケーキ？」

「ううん。チーズケーキ」

そっか。チーズケーキか。あたしはチーズケーキも好きだから……あれ。でも、チーズケーキにも色々あるよね？ レアとか、タルトになってるやつとか。

サキちゃんちに行けばわかるけれど、一度気になっちゃうとダメ。あたしはそういう性格。

「ねえ、サキちゃ……」

「あらサキちゃん。久し振りねえ」

「あ、伯母さん。お久しぶりです」

あたしが話し掛けようとしたら、女の人がサキちゃんに声をかけた。

サキちゃんが深々とお辞儀をしたので、何となくあたしもお辞儀をした。伯母さんっていうことは、親戚の人だから、また会うかもしれないし。

「それにしても、サキちゃん、キレイになったわねえ」

「ありがとうございます。伯母さんも、お元気そうだなによりです」
サキちゃんはいつもと全然違って、何て言うか、淑女っていう感じで、とても優雅に微笑んで、あたしの知らないサキちゃんがいた。伯母さんは少し話したあと、歩いていった。

「ふー。偶然。ちよっと、びっくりしちゃった」

「……うん」

「さ、かえろ」

あ。サキちゃんがあたしの手をとって歩き出した。

大きく手を振りながら弾むように歩く、いつものサキちゃん。

サラサラの長い髪。キレイな顔。スタイルもよくて、体育で着替えるとき、あたしはついサキちゃんに見とれてしまう。

「あ、ごめん。電話だ」

と、サキちゃんがケータイを取り出して電話に出る。

「もしもし。うん。うん。だから、何度も言ってるけれど、私、受験あるし、まだ付き合うとか興味ないですから。もう、かけてこないで」

「……」

また、あたしの知らないサキちゃん。

険しい表情で、キツイ口調で電話してる。いつもゆっくり喋るサキちゃんからは想像がなかったから、あたしは凄くビックリした。

「ミチ、ごめんね」

「ううん。電話、誰だったの。何か、サキちゃん怒ってたけど」

「あはは、恥しい。ほら、前にクラスの子にだまされて、ダブルデートさせられたことあったじゃない？」

「あ、うん」

「あのときの、男の人。何回も断ってるんだけど、付き合えつて
うるさくて。着拒しちゃう。ちゃっきよ」

サキちゃんは笑いながらケータイをしまった。もう、いつものサ
キちゃんだ。

「なんで断ってるの？ いやな人なの？」

聞かなくてもいいことだっただってわかってるけれど、気になってしま
ったから。

「だって、付き合ったりしたら、みっちゃんとかうやって帰れなく
なるし、遊べなくなるし」

やばい。そんな風に見つめられて手を握られたら、心臓、壊れる。
ただでさえ、知らなかったサキちゃんを知って、ドキドキしてる
のに。

サキちゃんはサキちゃんなのに、全然違うサキちゃん。

「ただいまー」

「おじやます」

サキちゃんの家。何回来ても、ドキドキする。

階段を上がってサキちゃんの部屋。女の子らしい部屋。レースの
カーテンとか、枕元のぬいぐるみとか、苺のカーペットとか。

「おまたせー……ジャジャーン！」

「わあ、すごいー!!」

サキちゃんがトレイを持って部屋に入ってきた。お皿の上には、
レアと、タルトのベイクドチーズケーキと、スフレの三つがのって
いた。

「親戚の人がね、ヨーロッパ旅行のお土産に、色んなチーズ送って
くれたの。で、調子に乗って作り過ぎちゃってお母さんに怒られち
やった」

あははって笑って、サキちゃんが座る。円いテーブル。時計の六
のところにあたしだしたら、サキちゃんは四くらい。近くって、
制服の袖が擦れ合ったりしてドキドキする。

紅茶もすごく美味しくて、三つもあったチーズケーキなのに、

二人であつというまに食べてしまった。

「あー、美味しかった。ごちそうさま」

「よかった、喜んでくれて」

サキちゃんが嬉しそうに笑ったから、あたしもすごく嬉しかった。
「サキちゃんのケーキ食べちゃったら、普通のケーキとか食べられなくなる」

「ふふ。じゃあ、また作ってあげるね？ ……あ」

「え？」

トレイを持って立ち上がりかけたサキちゃんが声を上げて、そして、あたしの唇とほつぺたの間ぐらいのところに……キスした。

「ついてたよ。この甘酸っぱいのは、レアチーズかな？」

「……」

悪戯っぽく笑って、サキちゃんが立ち上がる。

「紅茶、おかわりいれてくるね？」

「……」

呆然としてるあたしを残して、サキちゃんは部屋を出て行った。

サキちゃんの、柔らかい唇の感触が残ってる。顔が、パンパンに熱くなってる。

サキちゃんは、サキちゃんなのに、たくさんのサキちゃんがあつて。

あたしは、さっきの三つのチーズケーキを思いだす。

だけど、どのサキちゃんも、きつとドキドキ、美味しいんだろうな
なっと思ってた。

（後書き）

しっかりGL（百合）ではございませんが、
よろしければご賞味くださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1589g/>

デザートバイキング 『チーズケーキ』

2010年10月8日15時59分発行